

# 青銅器の埋納位置の解説（その4）：青銅器はなぜ埋められたのか

吉田 薫

## 1. はじめに

昨年度の報告「その3」において、荒神谷・加茂岩倉遺跡の出雲国における広域的な位置関係及び他遺跡との位置関係を明らかにするとともに、全国各地の未発見地の推定を行った。

本稿においては、引き続き青銅器が多数出土した遺跡についての、神社等との位置関係の検証を行うとともに、青銅器埋納直後の遺跡とされる西谷墳墓群と神社等との位置関係を把握する。また、新たな知見を踏まえて、青銅器埋納の意味を推察する。

(注) その1：荒神谷遺跡及び加茂岩倉遺跡の青銅器埋納位置の解説（H27年度）

その2：青銅器の埋納位置の解説2（H29年度）

※いずれも本文に付帯した（参考）として記述している。

## 2. 埋納位置の解説

### (1) 位置の図示の方法と関係性の判定

関係性の判定条件の詳細は拙稿「その3」に記したので、ここでは概要を記述する。

基図には国土電子地図を用い、埋納位置及び神社位置は直径50mの小円で表す。埋納位置と神社等との関係は、直線・円弧・図形が、埋納位置及び神社等の小円にかかることで判断する。神社位置については、当時はなんらかの祈りの場であったと解釈する。

判定に用いた関係性は図-1のとおりである。なお、関係性については、その有無を確かめることを目的としており、すべてを網羅したものではない。

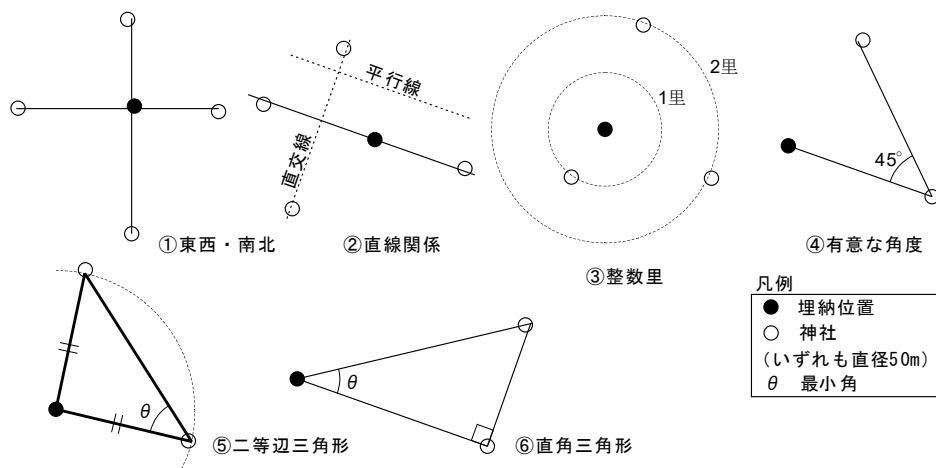


図-1 関係性の判定（例）

### (2) 青銅器出土箇所

青銅器が多数出土した全国各地の遺跡のうち、図-2 着色欄に示す箇所については過年度に示した。本稿では山陰の3遺跡を追加し、未着色の箇所について取り上げる。

表-1 青銅器の出土数 単位:個本

県名	遺跡名	銅鐸	銅剣	銅矛	銅戈
島根	荒神谷	6	358	16	
島根	加茂岩倉	39			
兵庫	桜ヶ丘	14			7
徳島	星河内	7			
徳島	源田	3			
徳島	安都真	4			
滋賀	大岩山	24			
福岡	原町				49
福岡	紅葉ヶ丘				27
福岡	安徳原田			12	
香川	我拝師山	1	5		
長野	柳沢	6			8
鳥取	青谷上寺地	4			
島根	志谷奥	3	6		
島根	中野仮屋	2			

(注) 着色欄は過年度に報告したもの。

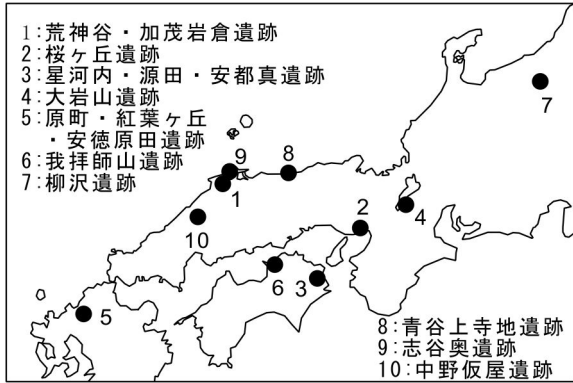


図-2 主な青銅器出土遺跡

### 3. 各地の青銅器遺跡

#### (1) 桜ヶ丘遺跡 (兵庫県)

1964年に、銅鐸14個と銅戈7本が土取作業中に出土した。現在は山麓まで住宅地の開発が進んでいる。

神社の存在は明らかでないが、一つ見つかった二等辺三角形の三辺は、4里-4里-3里といずれも整数里である。

表-2 桜ヶ丘遺跡と周辺地物の位置関係

記号	埋納位置と山、神社の関係	備考
整数里		
3里	桜ヶ丘-荒神山	
4里	桜ヶ丘-天狗岩	
二等辺三角形		角度(最小角)
A	天狗岩-桜ヶ丘-荒神山	44 4里-4里-3里

(注) ・遺跡、神社の呼称は省略。



図-3 桜ヶ丘遺跡と周辺の状況

#### (2) 星河内遺跡

(徳島県)

1932年に銅鐸7個が土砂採取時に出土した。

この遺跡では、東西・南北の4ラインが存在する。二等辺三角形は2個で相似形である。直角三角形は遺跡を通らないものを含めて2個確認できる。

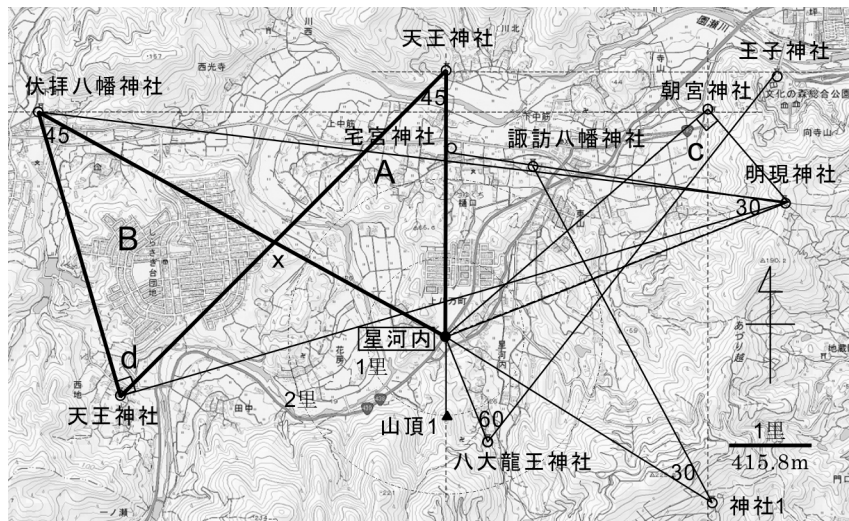


図-4 星河内遺跡と周辺の状況

図の範囲を拡大すれば、さらに多くの関係が見つかる可能性があるが、本稿においては遺跡位置の意図性の確認を主とする。これは他遺跡についても同様である。

表-3 星河内遺跡と周辺地物の位置関係

記号	埋納位置と山, 神社の関係	備考	記号	埋納位置と山, 神社の関係	備考
東西南北			45	星河内-宅宮-天王-天王	
東西	伏拝八幡-朝宮	線2本		星河内-伏拝八幡-天王	
南北	天王-宅宮-星河内-山頂1	線2本		星河内-八大龍王-王子	
整数里			相似三角形 角度(最小角)		
1里	星河内-山頂1		A	x-星河内-宅宮-天王	45 3角が同じ.
4里	星河内-神社1		B	x-伏拝八幡-天王	45 相似形
角度			直角三角形		
30	星河内-神社1-諏訪八幡		c	明現-朝宮-星河内	19
	星河内-明現-諏訪八幡-宅宮		d	伏拝八幡-天王-明現	23

(注) ・遺跡、神社の呼称は省略。

### (3) 大岩山遺跡 (滋賀県)

1881年に銅鐸14個が偶然に出土した。1962年には銅鐸10個が、東海道新幹線建設に伴う採土工事により出土した。出土地は、この地方の著名なランドマークである三上山(近江富士)から2.4kmの地点である。日本最大の銅鐸(高134.7cm、写真-1)の出土地でもある。

この遺跡では、神社同士を結ぶと、東西、南北、及び多数の平行線が出現し、東西南北の秩序が顕著である。

二等辺三角形は5個あり、このうちAは直角二等辺三角形、Cはほぼ直角二等三角形である。埋納位置を一点とする直角三角形は3個ある。



写真-1  
復元銅鐸

表-4 大岩山遺跡と周辺地物の位置関係

記号	埋納位置と山, 神社の関係	備考	記号	埋納位置と山, 神社の関係	備考
東西南北			45	大岩山-八幡-屯倉	
東西	矢取-貴布禰-長嶋	線7本		野上-土安-大岩山	
南北	八幡-大岩山	線5本		大岩山-土安-妻之	
埋納位置通過直線(東西軸からの角度)				大岩山-木部-高木	
26	鏡-大岩山-行事	直交.26線3本,		大岩山-生和-稻荷	
64	木部-日吉-山頂1	64線3本		大岩山-日吉-屯倉	
46	上野-三上-大岩山-日吉	直交.46線6本,		貴布禰-稻荷-日吉-大岩山	
44	牛尾-妻之-生和-大岩山	44線8本	二等辺三角形 度(最小角)		
整数里			A	大岩山-上野-春日-牛尾-妻之	45 直角二等辺
2里	大岩山-篠原		B	大岩山-篠原-長嶋-長沢	40
3里	大岩山-岩上		C	大岩山-春日-日吉	45 直角二等辺?
4里	大岩山-野上		D	大岩山-春日-虫生-木部	50
6里	大岩山-三上山		E	大岩山-貴布禰-屯倉	54
角度(45°以外及び二等辺三角形は省略)			直角三角形		
45	大岩山-山頂2-貴布禰		f	稻荷-篠原-大岩山	41
	山頂2-稻荷-大岩山		g	屋棟-生和-大岩山	36
			h	屯倉-行事-大岩山	32

(注) ・遺跡、神社の呼称は省略。

(注) 出土地点は3カ所(14個, 9個, 1個)であり、それぞれ40~50m程度離れているが、図に表現できないため『青銅器埋納地調査報告書I(銅鐸編)』<sup>1)</sup>に示される箇所について検討した。

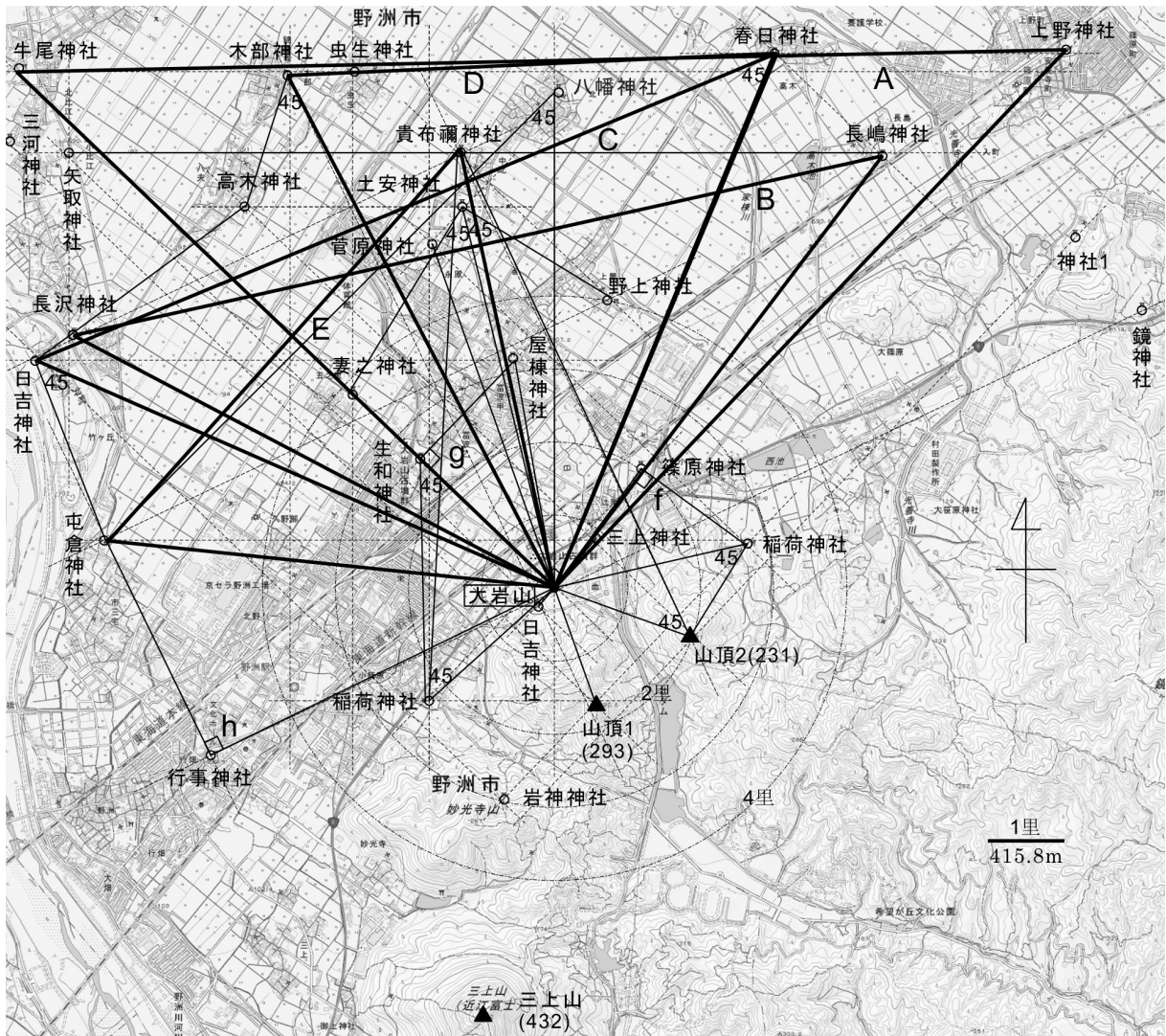


図-5 大岩山遺跡と周辺の状況

#### (4) 原町・紅葉ヶ丘・安徳原田遺跡（福岡県）

原町遺跡からは、1969年に銅戈49本が水道管理設工事中に出土した。原町から1.9km離れた紅葉ヶ丘遺跡からは、1967年に銅戈27本が宅地造成の土取作業中に出土した。さらに紅葉ヶ丘から3.6km余り離れた安徳原田遺跡からは、1894年に銅矛12本が耕作中に出土した。

図-6において、東西・南北方向ともに複数の線を見出すことができる。

埋納位置と神社等を結ぶ直線は多数あり、それぞれ直交関係や平行線も多く見られる。整数里は、それぞれの遺跡において1~4件、計8件が確認できる。

二等辺三角形は19個を図示したが、図が見にくくなるため省略したものもある。このうち、特に意図性が強いものは次のとおりである。相似形：AとB、LとO、MとR、同一形状：FとG、直角二等辺三角形：I、正三角形：J。

直角三角形は10個見出すことができる。このうち、dとiは相似形である。gは角度の違いがわずかなので、直角二等辺三角形（最小角45°）の可能性がある。1°違いで相似形となる直角三角形が数組ある。

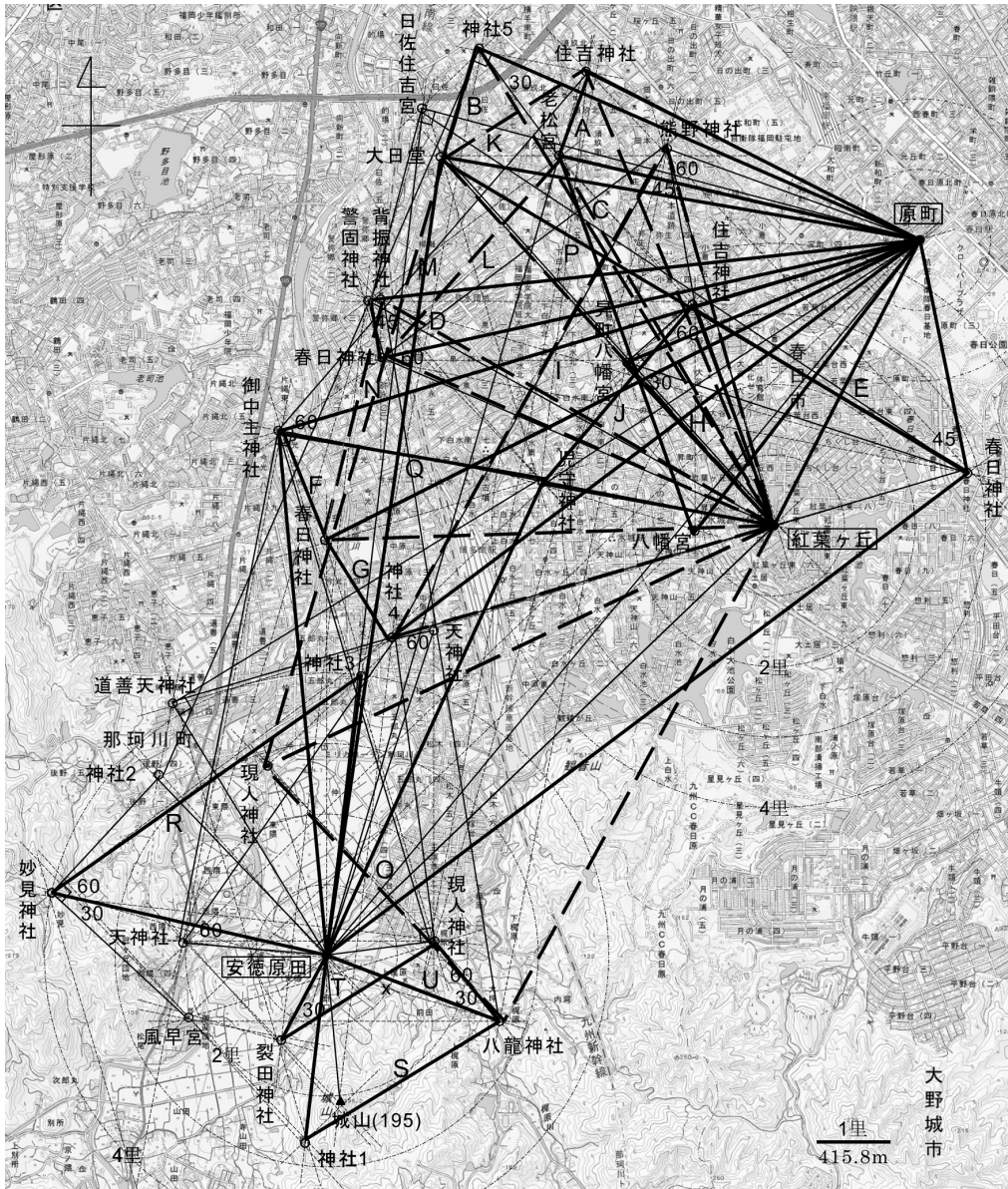


図-6  
原町・紅葉ヶ丘  
・安徳原田遺跡  
と周辺の状況

表-5 原町・紅葉ヶ丘・安徳原田遺跡と周辺地物の位置関係

記号	埋納位置と山、神社の関係	備考	記号	埋納位置と山、神社の関係	備考	記号	埋納位置と山、神社の関係	備考
東西南北			角度			紅葉ヶ丘		
東西	大日堂-老松	線5本	30	原町-神社5-老松		I	紅葉ヶ丘-熊野-神社4	45 直角二等辺
南北	春日-安徳原田	線4本		紅葉ヶ丘-原町-現守		J	紅葉ヶ丘-住吉-現守	60 正三角形
埋納位置通過直線(東西軸からの角度)				春日-昇町八幡-紅葉ヶ丘		K	紅葉ヶ丘-住吉-大日堂	20
17	原町-住吉-御中主	直交線4本,73		安徳原田-妙見-風早		L	紅葉ヶ丘-老松-春日	36 Oと相似形
73	熊野-紅葉ヶ丘	線9本		安徳原田-裂田-現人		M	紅葉ヶ丘-神社5-現人	48
48	大日堂-昇町八幡-紅葉ヶ丘	線7本		安徳原田-八龍-現人		N	紅葉ヶ丘-背振-春日	32
11	紅葉ヶ丘-現守-御中主	直交11線4	45	日佐住吉-春日-原町		O	紅葉ヶ丘-現人-八龍	36 Lと相似形
79	熊野-八龍	本,79線6本		紅葉ヶ丘-熊野-神社4			安徳原田	
74	安徳原田-老松-住吉	直交74線3		紅葉ヶ丘-警固-春日		P	安徳原田-春日-大日堂	45
16	警固-春日	本,16線4本		原町-熊野-住吉		Q	安徳原田-現守-御中主	30
84	神社1-安徳原田-神社3-日佐住吉	直交86線4		紅葉ヶ丘-住吉-現守		R	安徳原田-神社3-妙見	48
6	天神社-安徳原田	本,6線2本		熊野-春日-紅葉ヶ丘		S	安徳原田-神社1-八龍	52
44	紅葉ヶ丘-安徳原田	直交	60	住吉-御中主-紅葉ヶ丘			直角三角形	
46	原町-天神社	44線8本		安徳原田-天神-神社4		a	紅葉ヶ丘-原町-神社5	35
	昇町八幡-紅葉ヶ丘	46線8本		神社2-妙見-安徳原田		b	原町-神社5-警固-神社2	31
	神社2-安徳原田			神社4-天神-安徳原田		c	原町-日佐住吉-警固	21
整数里				安徳原田-八龍-背振		d	住吉-昇町八幡-紅葉ヶ丘	22 iと相似形
[原町]				角度(最小角)		e	道善天神-紅葉ヶ丘-住吉	16
10里	原町-神社3		原町			f	原町-住吉-御中主-現人	38
[紅葉ヶ丘]						g	紅葉ヶ丘-現守-御中主-天神	44 直角二等辺の
5里	紅葉ヶ丘-天神社		A	原町-住吉-老松	14	h	現守-道善天神-安徳原田	34
6里	紅葉ヶ丘-春日-老松		B	原町-神社5-大日堂	14	i	神社2-安徳原田-紅葉ヶ丘	22 dと相似形
7里	紅葉ヶ丘-大日堂-住吉		C	原町-老松-八幡	57	j	安徳原田-現人-神社4	20
8里	紅葉ヶ丘-現人-八龍-神社5		D	原町-警固-春日	6			
[安徳原田]			E	原町-住吉-春日	47			
2里	安徳原田-天神		F	原町-御中主-春日	10			
4里	安徳原田-神社3-妙見		G	原町-春日-神社4	10			
8里	安徳原田-八幡		H	原町-昇町八幡-紅葉ヶ丘	40			

(注)・遺跡、神社の呼称は省略。

(5) 我拝師山遺跡（香川県）

1966年、PC地点から銅鐸1個が開墾中に出土した。さらにPA地点から銅剣4本、PB地点から銅剣1本の計5本が出土した。この遺跡においては南北関係が顕著であり、PA～PC地点ともに3～4km余り南の神社でその位置が示されている。

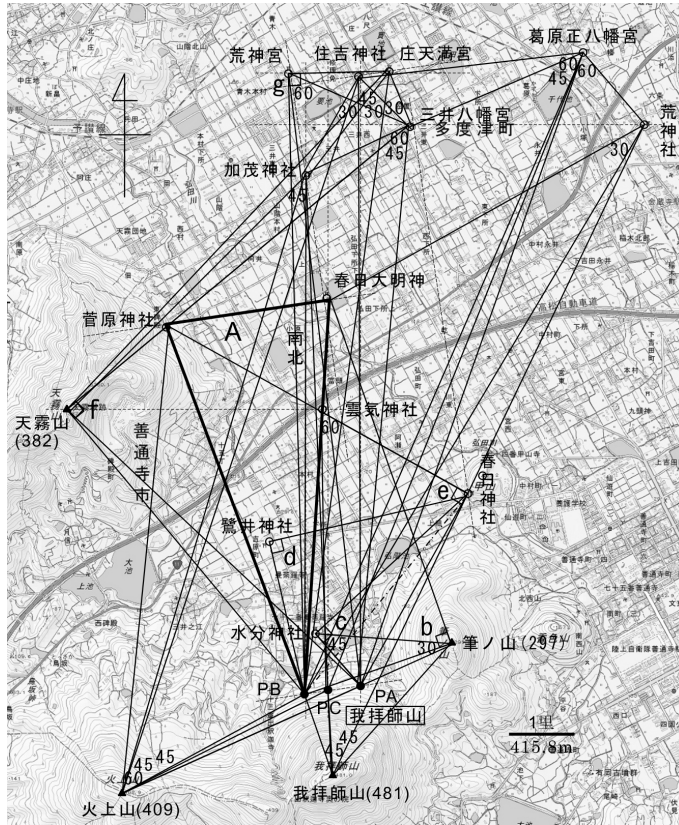


図-7 我拝師山遺跡と周辺の状況

表-6 我拝師山遺跡と周辺地物の位置関係

記号	埋納位置と山、神社の関係	備考
東西南北		
東西	荒-庄天満	線3本
南北	住吉-PA 加茂-PB 春日大-PC-我拝師山	埋納位置 線3本
埋納位置通過直線(東西軸からの角度)		
8	PB-PC-PA(埋納位置)	直交.8線3
82	三井八幡-春日	本.82線2本
整数里		
1里	PB-水分	
9里	PA-三井八幡	
10里	PA-荒	
	PB-荒、PB-庄天満	
	PC-庄天満	
角度(45° 以外は省略)		
45	PC-葛原正八幡-三井八幡-加茂	
	PA-三井八幡-菅原-天霧山	
	三井八幡-住吉-PA	
	PB-加茂-天霧山	
	加茂-火上山-PB	
	住吉-火上山-PC	
	PB-我拝師山-春日-荒	
PC-我拝師山-筆ノ山		
筆ノ山-水分-PA		
二等辺三角形 角度(最小角)		
A	PB-春日大-菅原	24
直角三角形		
b	PB-筆ノ山-春日大	23
c	春日-水分-PA	18
d	春日-鷺井-PB	38
e	PA-春日-菅原	33
f	三井八幡-菅原-天霧山-PB	40
g	庄天満-天霧山-PA	41
h	庄天満-荒-PB	9

(注)・PA・PB・PCは埋納位置、神社の呼称は省略。

(6) 青谷上寺地遺跡

低湿地の遺跡であり、弥生人の脳をはじめとし、膨大な数の土器、鉄器・青銅器・木器・石器・骨角器する多彩な遺物が出土したことから「弥生の地下博物館」と呼ばれる。

1998～2000年に、国道及び県道改良工事に伴う発掘調査により4個の銅鐸が出土した。



図-8 青谷上寺地遺跡と周辺の状況

表-7 青谷上寺地遺跡と周辺地物の位置関係

記号	埋納位置と山、神社の関係	備考
埋納位置通過直線(東西軸からの角度)		
32	養郷-青谷上寺地-神社3	
81	山頂1-青谷上寺地-湊	
整数里		
3里	青谷上寺地-神社1、山頂2	
二等辺三角形 角度(最小角)		
A	青谷上寺地-神社2-湊	56
B	青谷上寺地-山頂2-神社1	31
直角三角形		
c	青谷上寺地-神社1-養郷	39
d	神社2-潮津-青谷上寺地	39
e	青谷上寺地-潮津-山頂3	36

(注)・遺跡、神社の呼称は省略。

(7) 志谷奥遺跡

1973年、土地所有者が柿の木の施肥のため斜面を掘ったところ、銅鐸2個、銅剣6本が出土した。2016～2017年の遺物の再評価の結果、3個目の銅鐸の破片が含まれていることが判明した。

埋納位置は、佐太神社と八上神社を結んだ線上である。

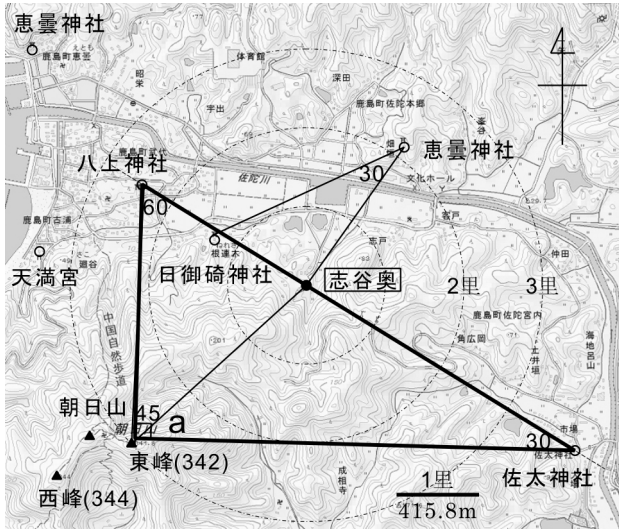


図-9 志谷奥遺跡と周辺の状況

表-8 志谷奥遺跡と周辺地物の位置関係

記号	埋納位置と山、神社の関係	備考
埋納位置通過直線(東西軸からの角度)		
32	佐太-志谷奥-八上	
整数里		
3里	志谷奥-朝日山東峰	
4里	志谷奥-朝日山西峰	
角度		
30	志谷奥-恵曇-日御碕	
45	東峰-佐太-志谷奥-八上	
60	八上-東峰-志谷奥	
60	佐太-志谷奥-八上-東峰	
直角三角形		角度(最小角)
a	八上-東峰-佐太-志谷奥	30 角60-90-30

(注)・遺跡、神社の呼称は省略。

(8) 中野仮屋遺跡

1914年(大正3)、向齒無山(むかばなしやま)山麓のコバンバヤシにおいて、土地所有者が山林を耕しているとき、地下60cmのところから銅鐸2個が発見された。

埋納位置は、折居神社と向齒無山を結んだ線上にある。

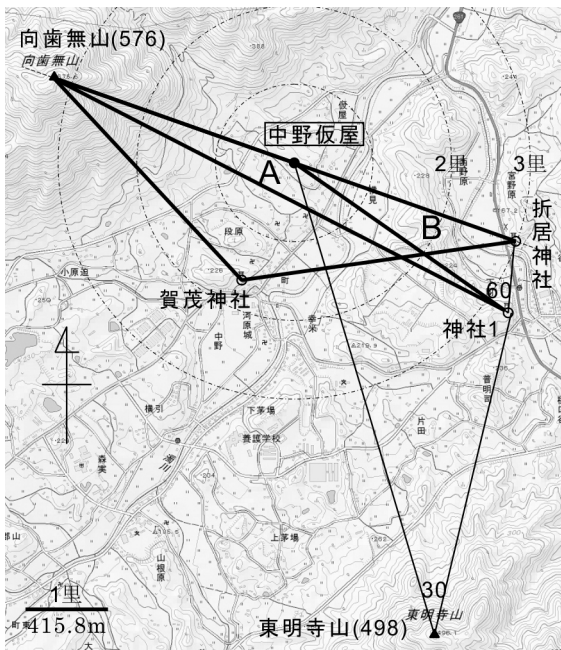


図-10 中野仮屋遺跡と周辺の状況

表-9 中野仮屋遺跡と周辺地物の位置関係

記号	埋納位置と山、神社の関係	備考
埋納位置通過直線(東西軸からの角度)		
19	折居-中野仮屋-向齒無山	
整数里		
3里	中野仮屋-折居	
角度		
30	中野仮屋-東明寺山-神社1	
60	中野仮屋-神社1-折居	
二等辺三角形		角度(最小角)
A	中野仮屋-向齒無山-神社1	8
B	賀茂-折居-中野仮屋-向齒無山	28

(注)・遺跡、神社の呼称は省略。

#### 4. 青銅器埋納後の遺跡の位置関係・・・西谷墳墓群（出雲市）

荒神谷遺跡及び加茂岩倉遺跡に多数の青銅器が埋納された後、荒神谷遺跡から西に約7kmほど離れた斐伊川左岸丘陵部に四隅突出型墳丘墓が造られるようになった。

この墳墓群は、出雲郡の神名火山の仏経山の真西11里（4.6km）に位置する。

墳墓群と神社等との関係は、整数里2、直線関係、二等辺三角形2、直角三角形5が見られる。その他、30°、45°、60°の角度関係は見られるが、古墳群と同じ斐伊川左岸側との関係が多く、対岸側との関係は少ない。このことは、関係性が偶然生じたわけではない証拠ともなる。

半径4里円内について荒神谷遺跡と比較すると、神社との関係が希薄である。（図-12）

神社との関係性	西谷古墳	荒神谷遺跡
整数里	0/5 (0%)	6/7 (86%)
二等辺三角形	2/5 (40%)	6/7 (86%)

神社との関係は、青銅器埋納遺跡よりも希薄、または異質であると思われる。松本司著『風水ウォーキング 古代遺跡謎ときの旅』<sup>2)</sup>は、さらに広範囲に関係性を検討し、大黒山-荒神谷遺跡-経島（日沈宮）、西谷古墳群-出雲大社-経島は直線関係であると指摘する。このことについては、今後の検討課題としたい。

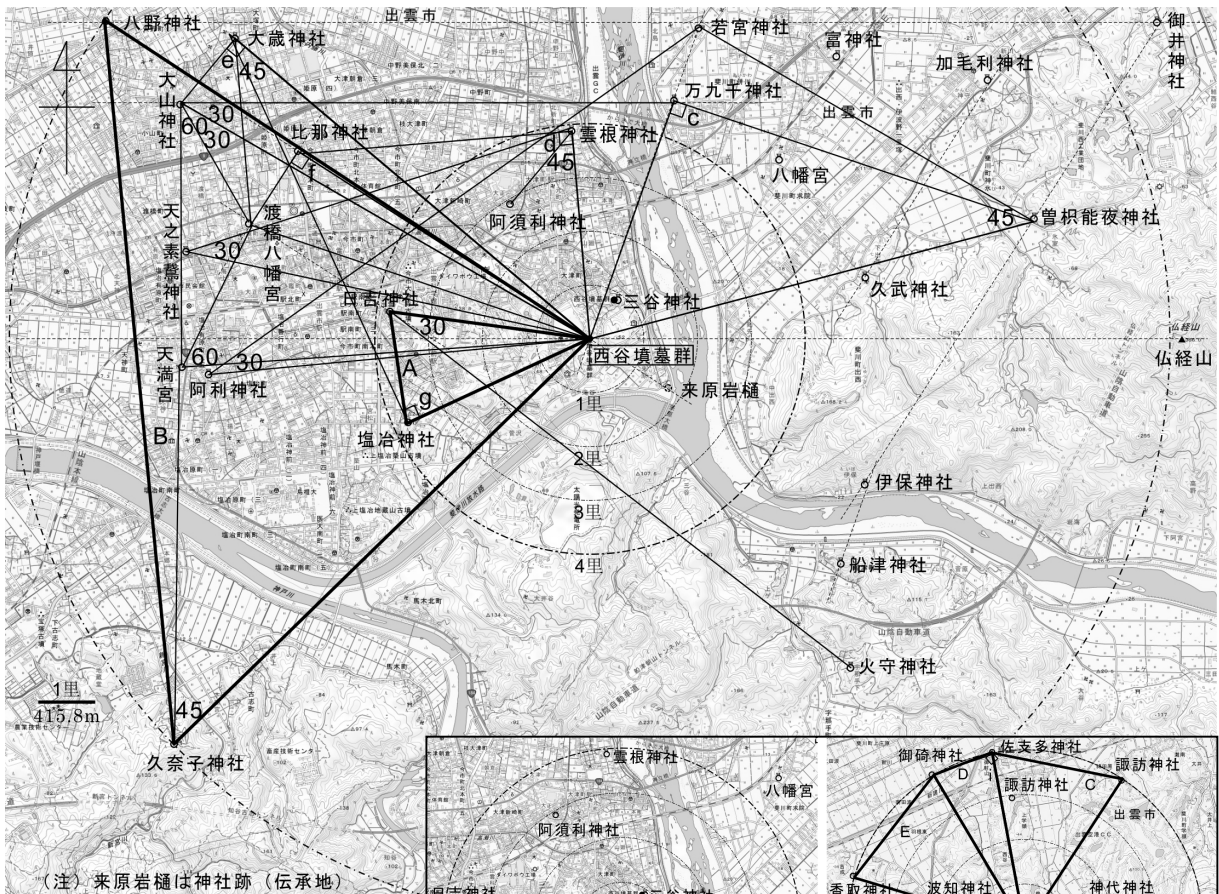


図-11 西谷墳墓群と周辺の状況

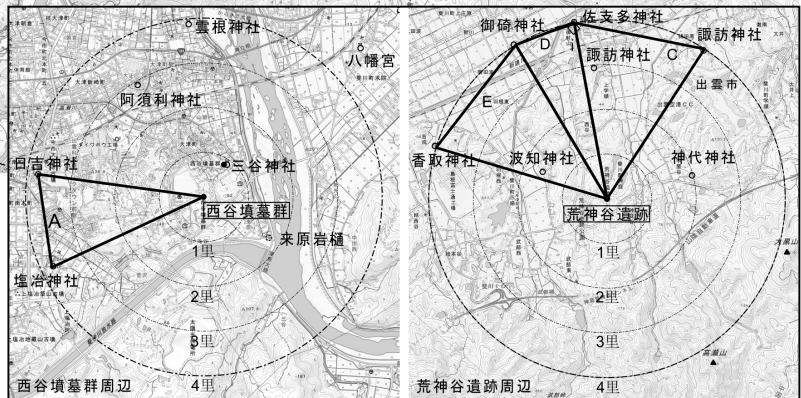


図-12 西谷墳墓群と荒神谷遺跡の比較



表-10 西谷古墳群と周辺地物の位置関係

記号	埋納位置と山, 神社の関係	備考	記号	埋納位置と山, 神社の関係	備考
東西南北			45	西谷-曾根能夜-若宮	
東西	仏経山-西谷	線3本		西谷-雲根-阿須利	
埋納位置通過直線(東西軸からの角度)				西谷-大歳-渡橋	
33	比那-西谷	直交.33線2		大山-久奈子-西谷	
57	三谷-西谷	本.57線4本	60	西谷-大山-天満	
71	若宮-万九千-西谷	線2本		渡橋-天満-西谷	
整数里			二等辺三角形 角度(最小角)		
7里	富		A	西谷-日吉-塩冶	33
11里	仏経山		B	西谷-八野-久奈子	78
角度			直角三角形		
30	万九千-大山-西谷		c	曾根能夜-万九千-西谷	33
	西谷-大山-渡橋		d	西谷-雲根-比那	37
	雲根-天之素鷲-西谷		e	西谷-大歳-大山	10
	西谷-日吉-火守		f	西谷-比那-渡橋	14
	若宮-阿利-西谷		g	大歳-塩冶-西谷	25

(注) ・遺跡、神社の呼称は省略。

### 5. 青銅器埋納後の状況

農耕祭祀に用いられたとされる青銅器の埋納理由としては、①地中保管説、②境界埋納説、③隠匿説、④廃棄説等色々あるが、未だ結論は出されていない。

弥生時代後期になると、出雲地方ではいち早く青銅器が埋納され、西谷墳墓群で見られるような四隅突出型墳丘墓の時代となった。

同時期、九州地方では広矛、

近畿・東海地方では大型化した銅鐸(写真-1 参照)を用いた青銅器祭祀が行われていた。

拙稿「その3」で述べたように、青銅器が水田整備やその保全を祈る農耕祭祀に用いられたとするならば、墳丘墓はその代替となるのだろうか。直接の言及は困難なので、次の古墳時代の状況を取りあげる。

近年、農業土木技術者・田久保晃氏(技術士:農業部門)により、前方後円墳にはため池の機能があった、との説が提唱された。同氏著『水田と前方後円墳』<sup>4)</sup>は、「前方後円墳の多くは、山地と緩斜面の境界線上に設置され、墓であるとともに周濠は下流水田のための灌漑のため池としての機能があった。そして、円形部が墓であり、前方部は仮設道路及び土捨て場で、あとで形状を整えたものである。」とする。

通説の「権力者がその権勢を示すために造り、

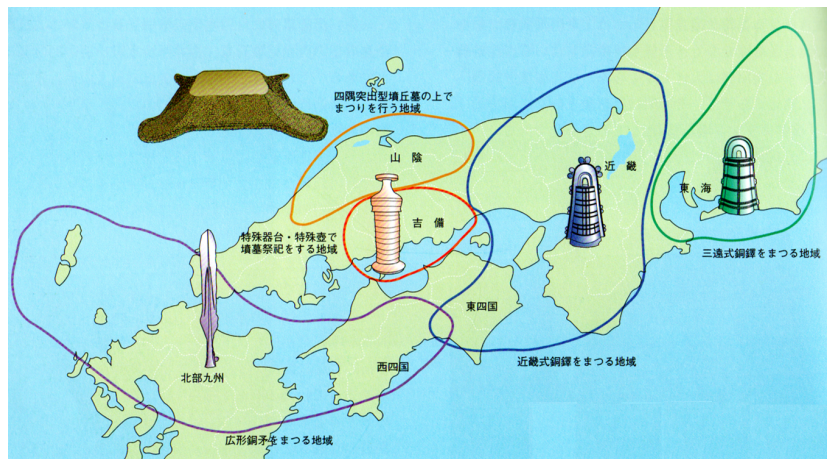


図-13 弥生時代後期の各地域のシンボル  
(『古代出雲文化展』<sup>3)</sup>より引用)



(a) 前方後円墳の設置位置

前方部は祈りの場である。」に比べて、合理的・実務的な見解であり、一土木技術者として大いに首肯できる。

拙稿「その3」においては、「古墳を中心とした祭祀が青銅器祭祀の代替だとすれば、少なくともその初期には、被葬者には祖霊として地鎮等、現世を守護することが負託されたと解釈すべきではないか。」としている。

合わせると、前方後円墳に葬られる権力者には、ため池機能をもつ周濠とともに下流の水田を保護し、水稻の順調な生育を見守るという役割が負託された、ということになる。

とすれば、弥生時代から古墳時代に遷り変わる過程の青銅器埋納後の墳丘墓の埋葬者には、水田の保全と水稻の順調な生育が祈られた、ということになる。

弥生時代	～	墳丘墓	～	古墳時代（前方後円墳）
農耕祭祀		青銅器を用いた祭祀	→ ?	→ 埋葬者への祭祀

## 6. 青銅器埋納の理由

青銅器を埋納し、墳丘墓が造成される理由は何なのだろうか。

初期の水田は、木器や石器で拓かれ、小規模で未熟なものであったことだろう。しかし、鉄器が普及し始めれば、水田造成の規模も方法も異なる。多くの場所が再造成されたと思われる。戦後、重機の普及や農機具の機械化とともに進展した土地改良事業と似ている。

青銅器は、旧来の水稻耕作の象徴である。一方、墳丘墓は、鉄製品を用いた新しい造成工事の象徴である。墳丘墓造成に関わる土木技術は、水田の造成や堰・水路の構築に即座に応用できる。土木技術の普及の場ともいえよう。

つまり、古い農耕祭祀のシンボルとしての青銅器は、古い水田の改築とともにその役割を終え、埋納されたとも考えられる。その後、時を経て、祭祀対象である祖霊の墳墓と、ため池機能をもつ周濠が合体するような形で前方後円墳が造成されようになったと解釈すると流れがスムーズである。

本年の研究報告は以上だが、青銅器の大量埋納の理由の説明はついておらず、今後の検討課題としたい。

## 参考文献

- 1) 島根県埋蔵文化財調査センター，島根県古代文化センター：青銅器埋納地調査報告書 I（銅鐸編），島根県教育委員会，2002.
- 2) 松本司：風水ウォーキング 古代遺跡謎ときの旅，小学館，1999.
- 3) 島根県教育委員会，朝日新聞社：古代出雲文化展，1997.
- 4) 田久保晃：水田と前方後円墳，農文協プロダクション，2018.

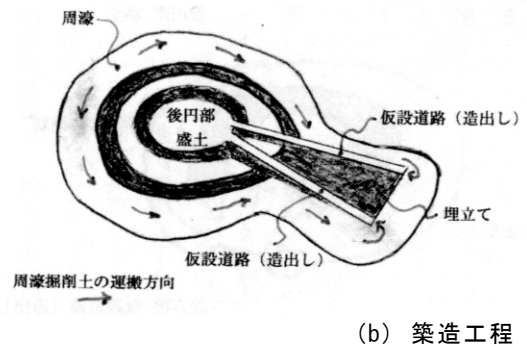


図-14 前方後円墳の設置位置と築造工程  
（『水田と前方後円墳』<sup>4)</sup>より引用）